

# *The Financier, The Titan* における「都市」と「牧歌」 — クーパーウッドを巡る女性像の変化が示すもの —

土屋 陽子

## 1. はじめに

2012年5月、*The Wall Street Journal* に Theodore Dreiser の *The Financier* (1912) 出版100周年を記念した Leonard Cassuto による記事 “A Life Driven by Desire” が掲載された。

We remember Theodore Dreiser mainly for his deeply felt tales of have-nots who yearn for much more than the world gives them. ... But Mr. Dreiser also wrote admiringly of the wealthy, and this year marks the 100th anniversary of “The Financier,” his sweeping and minutely observed story of an enormously successful capitalist.

ドライサーの長編第三作目『資本家』、第四作目 *The Titan* (1914)は、後に発表される *The Stoic* (1945)と合わせた三作から成る *Trilogy of Desire* の第一、二部にあたる作品である。『欲望三部作』は、19世紀後半(1860年代～1900年)のアメリカ資本主義社会を背景とした三部作であり、実在した、鉄道事業で大成功を遂げ悪徳資本家としても名を馳せた Charles T. Yerkes をモデルとした主人公、Frank Algernon Cowperwood の資本家としての成功と失敗の変遷を、彼の女性関係と並行させながら描いた物語である。上記の記事の中で示されているように『資本家』は、社会的弱者の立場にいる若者に焦点を当てた *Sister Carrie* (1900) や *Jennie Gerhardt* (1910)、『資本家』の約十年後に発表される *An American Tragedy* (1925)とは異なり、最初から社会的強者の立場にいる若者がその力を使って如何に都市社会を生き抜いていくかを描いた作品である。そして、フィクションではあるが、実在した資本家の生涯を綿密な調査に基づきほぼ忠実に再現していることから、<sup>1</sup>一般に本作品は、Cassuto が述べているように、19世紀後半のアメリカ資本主義社会における「好況時代の悪徳資本家」(Gilded Age robber baron) と政

治家の腐敗の実態を暴いた作品であると解釈されている。例えば Charles Child Walcutt は、実在した資本家の生活の記録を基にしてアメリカ新時代の幕開けの実態を示した本作品は、次の『巨人』と共に、「アメリカの自然主義小説のどの作品にも見られない程多大な記録を示した作品である」<sup>2</sup>と述べ、社会の出来事を題材として事実のありのままを描こうとするドライサーの自然主義を代表する作品であると指摘している（199）。このように、アメリカ社会に拡がっていたヴィクトリア朝的伝統や宗教的道徳観が一切排除された資本主義下の都市社会の実態を示した作品であるというのが、これまで一般的になされてきた『欲望三部作』第一、二部の解釈である。<sup>3</sup>

しかし、社会的強者を主人公に都市社会を描くことでドライサーが示そうとしたことは、都市社会の腐敗の実態だけではない。作品の舞台である世紀転換期といえば、産業化が進みアメリカ社会の都市化が顕著になる時代である。<sup>4</sup>James L. Machor が述べているように、従来、この時期のアメリカ文学には、反道徳性から示される「反都市」（Anti-Urban）の傾向が強く見られると言われている（329）。しかし、当時の人々は都市化のもたらす非道徳性を認めつつも、その華やかさに強く憧れていた。そしてその一方で、都市とは対照的なものである牧歌的自然に対する理想にもまた、憧れを抱いていたのである。<sup>5</sup> Raymond Williams は著書 *The Country and the City* の第一章 “Country and City” の中で、都市と田舎の定義として、一般に「都市」は、金銭、贅沢、学問、文明など発展した生活に関わるイメージを持つものであり、一方「田舎」は、平和、質素、無垢、因習など、自然と関連した、牧歌的 (the pastoral) なイメージを持つものであると述べている（1）。また彼は最終章 “City and Country” の中で、牧歌にしろ、都市にしろ、変化し続ける歴史的事項であるとしながらも、「とはいえ、牧歌と都市に関わる観念は依然としてその力を失ってはいない」といい（289）、一般的な解釈として、都市には未来的なイメージがあり、牧歌には過去のイメージが常にあると述べている（297）。そのように考えると、世紀転換期のアメリカ社会にはまさに、新しい価値と古い価値が混在しており、それは、ヴィリアムズも述べているように、「都市」(the urban) と「牧歌」(the pastoral) の二項対立を導き、当時の人々にとって重要

な問題となっていたことが分かる。<sup>6</sup>

そのような時代を背景に描かれた『資本家』、『巨人』を、腐敗した都市の実態を暴いた作品だと解釈し、また、これまで道徳的批判が多くされてきたことを考慮すると、<sup>7</sup>本作品にはドライサーの反都市的見解が示されていると考えることができる。作品の中で、富や贅沢、または野望を示す主人公クーパーウッドは、都市を象徴するものとして捉えられ、<sup>8</sup>確かにその描写にドライサーの否定的見解を読み取ることも出来る。しかし、Robert Penn Warren による、『資本家』は “The Horatio Alger myth” をモデルにした作品であり、<sup>9</sup>都市を支配する資本家達の社会における上昇志向とそれに対するドライサー自身の肯定的考えを示しているという指摘があるよう(56)に、都市社会を体現すると考えられるクーパーウッドの上昇志向に、ドライサーが必ずしも批判的であったわけではない。反道徳性のみ指摘されがちであるクーパーウッドの上昇志向だが、そこには彼が都市との関わりを強めるにつれて顕著になる美への探究も見ることができる。本作品においてそれは特に彼の女性関係を介して示されているが、クーパーウッドの女性に対する態度には、彼の都市社会での支配的欲望が表わされている一方で、都市社会からの逃避、つまり都市と対照的である牧歌への憧れも表されている。クーパーウッドを都市の体現であると考えると、ドライサーの他作品にも度々見られるように、本作品においても、女性が牧歌を体現するものとして描かれていることが分かる。そのような視点でクーパーウッドの女性遍歴を見ていくと、そこには「都市」と「牧歌」が二項対立で存在する当時のアメリカ社会の曖昧さが示されていると同時に、それに対するドライサー自身の見解の曖昧さも示されていることが分かる。そこで、本稿ではクーパーウッドの女性関係の変化に着目し、そこに示された都市と牧歌の関係を読み取ることで、両者の関係が『資本家』、『巨人』の中でどの様に描かれ、変化していくのかを検証する。

## 2. 三人の女性像の変化が示す「都市」と「牧歌」の関係

作品を通し、クーパーウッドはあきれるほど多くの女性と交渉するが、都市と牧歌の関係を考察する上で特に重要であると考えられる女

性が三人いる。最初の妻 Lillian、二人目の妻 Aileen、そして最後の恋人となる Berenice である。この三人が特にクーパーウッドの生涯で影響を持つ存在であることは、『巨人』の中で彼が自身の人生についてベレナインに語っている次の場面からも分かる。

“Let me tell you a little something about my life, will you? It won’t take long. I was born in Philadelphia. My family had always belonged there. I have been in the banking and street-railway business all my life. My first wife was a Presbyterian girl, religious, conventional. She was older than I by six or seven years. I was happy for a while – five or six years. We had two children – both still living. Then I met my present wife. She was younger than myself – at least ten years, and very good-looking. She was in some respects more intelligent than my first wife – at least less conventional, more generous, I thought. I fell in love with her, and when I eventually left Philadelphia I got a divorce and married her. ... But my own ideals in regard to women have all the time been slowly changing. I have come to see, through various experiments, that she is not the ideal woman for me at all.”

(*The Titan*<sup>10</sup> 421)

ここでリリアンは因習的(conventional)なイメージ、即ち古い価値観を伴うものとして示されており、一方エイリーンはリリアンに比べ知識があり(more intelligent)、反因習的(less conventional)なイメージ、即ち新しい価値観を伴うものとして示されている。先述したウィリアムズの定義と照らし合わせてみると、リリアンが牧歌を示すものとして描かれているのに対し、エイリーンは牧歌の世俗化を示すものとして描かれていると考えられる。そして、そのようなエイリーンの描写には、都市社会へ出していくようになった女性像、つまり、新しい女(New Woman)の出現が示唆されている。しかし、リリアンはその牧歌的性質が原因で、エイリーンはその反牧歌的性質がシカゴ社交界に受け入れられないという理由から、結局クーパーウッドに見捨てされることになる。クーパーウッドとこの二人との関係は、都市での金融、鉄道事業における成功に対する彼の野望と関連し進められていく。クーパーウッドの関心が牧歌よりも都市に優先的に向けられており、リリアンとの関係に都市に潰される牧歌を、エイリーンとの関係に都市社会に

における都市と牧歌の共存の不可能性が読み取れる。

しかし、クーパーウッド自身もここで自身の考えの変化を認めていくように、ベレナイシに対する彼の態度は上記の二人とは異なって示される。ベレナイシは牧歌的イメージを示す存在として描かれつつも、リリアンやエイリーンのように男性に従属する感傷的な女性としては示されておらず、むしろ、クーパーウッドを従属させる側面もみせる。即ち、都市と牧歌、二つのイメージが彼女の中には見られ、両者の共存に対する肯定的な見解が彼女の存在には示されているのである。女性遍歴に示されたこのような都市と牧歌の関係の変化を詳しく考察するため、三人の女性の描写を一人ずつ検証していきたい。

#### (1) Lillian Semple — 「都市」に潰される「牧歌」

最初の妻であるリリアンは、保守的で実直な夫を持つ五歳年上の女性である。彼女の夫が鉄道事業について話をするためにクーパーウッドの父親を訪問することが二人の出会いのきっかけとなる。二人が最初に出会う場面でのリリアンの描写は次のようなものである。

Mrs. Semple read a little – not much. She had a habit of sitting and apparently brooding reflectively at times, but it was not based on any deep thought. She had that curious beauty of body, though, that made her somewhat like a figure on an antique vase, or out of Greek chorus. ... Thoroughly conventional, satisfied now that her life was bound permanently with that of her husband, she had settled down to a staid and quiet existence. (F 44)

ウィリアムズは文学における牧歌的文学原型として、古代ギリシア・ローマの農民集会で行われていた牧歌詩会の習慣を例に挙げている。また、Leo Marx は論文 “Pastoralism in America” の中でパストラリズムの意味を「古代ギリシア・ローマでそうあったように自然の中にひきこもることを神聖だと捉えること」であると述べている。<sup>11</sup>古代ギリシアのイメージが牧歌的イメージを導き出すものとして捉えられている。リリアンについての描写にみられる “an antique vase” 及び “Greek chorus” という表現はいずれも古代ギリシア芸術を思い浮かばせるものであり、<sup>12</sup>リリアンの美を古代ギリシアと結びつけて描くこと

で、牧歌的イメージを持った女性として示そうとしていると考えられる。また、女性に対して、古代から続く不变の美を理想として抱くクーパーウッドの態度も見ることが出来る。しかしその一方でクーパーウッドは、人妻でもあり因習的でもあるリリアンを手に入れることで示される反因習性にも意義を見出すようになる。リリアンに惹かれ始めたころ、クーパーウッドは男女関係に関する自身の見解として、「女性は家庭や身内のために尽くすべきだという考えには関心がなかった」と述べ、次のように主張している。

There was great talk concerning morality, much praise of virtue and decency, and much lifting of hands in righteous horror at people who broke or were even rumored to have broken the Seventh Commandment. He did not take this talk seriously. (F 37)

クーパーウッドが世間一般に言われるような、家庭のために尽くす理想的な女性像を重要視してはいないことが示されている。因習的な女性の牧歌的イメージを否定することで、自身の反因習的态度を示そうとする彼の見解が窺える。このような彼の女性に対する見解には、牧歌の吸収を試みる都市の姿を読み取ることが出来る。また、クーパーウッドはリリアンに惹かれつつも、自分の最大の関心事は事業の成功であると考えており、資本家として成功すれば多少の不貞も許されると考える(F 38)。そもそも二人の出会いのきっかけがリリアンの夫が持ってきた鉄道事業の話であるということを考えても、彼が、牧歌よりも都市に重きを置いていることが分かる。

そのような折、リリアンの夫が早すぎる死を迎える。未亡人となつたリリアンをクーパーウッドは頻繁に訪ね、ビジネスにおける自身の力を行使し、彼女をサポートしようとする。そして、彼女に求婚する。始めは戸惑っていたリリアンであるが、結局は「彼により突然新しい世界への扉が開かれたように思えた。」(F 52)と結婚を決意する。二人の関係に、牧歌的なものが都市に吸収されていく様を窺うことができる。

牧歌を吸収することが都市の飛躍につながることを象徴するかのように、リリアンと結婚した直後から、クーパーウッドはビジネス界で

も躍進を遂げ、さらにそれは父の経営する銀行の成功をももたらし、クーパーウッド親子はフィラデルフィアの富裕層が居住する Girard Avenue に二軒並びの大邸宅を建てることとなる。クーパーウッドはその設計を、若い建築家 Ellsworth に多額の報酬を支払って一任し、<sup>13</sup>更に部屋を装飾する美術品の収集にも熱を入れる。一方リリアンはそういった彼の美的探究に興味を示すことはなく、ただ彼の意向に従うのみで、<sup>14</sup>やがて子供が出来ると家庭に籠るようになる。夫に従い家事に尽くすこのリリアンの姿は、それまでのアメリカ社会において理想とされてきた女性像であると考えられるが、クーパーウッドはそのような古い価値観を示す彼女に次第に満足出来なくなる。

その頃、クーパーウッドは若くてバイタリティに溢れ、因習にとらわれない女性、エイリーンに出会う。彼女の示す若々しい美しさに惹かれると同時に、それとは対照的なリリアンの子育てに疲れた体裁を見て「美しさを失った彼女をこの先ずっと手元に置くことは不満である」と感じるようになる(F 122)。リリアンの持つ牧歌的イメージが古いものとして示され、都市を支配しようとするクーパーウッドの見解には受け入れられないことが示されている。リリアンの牧歌的側面は、最終的には彼の示す世界に馴染むことが出来なかつたのである。このような二人の関係には、都市に吸収され潰されていく牧歌の様子を見ることが出来る。

## (2) Aileen Butler — 共存し得ない「都市」と「牧歌」

クーパーウッドがエイリーンに出会うのは、彼が鉄道事業に関する相談のため彼女の父 Edward Butler を訪ねた時である。彼女の第一印象について彼は次のように感じている。

What a bright, healthy, bounding girl! Her voice had the subtle vigorous ring of fifteen or sixteen. She was all vitality. What a fine catch for some young fellow someday, and her father would make him rich, no doubt, or help to. (F 69)

二人の出会いのきっかけが鉄道事業の相談であったということ、また「彼女の父は彼を金持ちにしてくれるだろう」という記述から、エイ

リーンに対するクーパーウッドの関心が、リリアンの時と同様、彼の事業の成功と関連して描かれていることが分かる。

しかし、エイリーンの示す女性像はリリアンに比べると複雑である。Sybil Weir はエイリーンについて以下のように指摘している。

Aileen is a forerunner of many 20<sup>th</sup> century fictional images of women; the erotic, individualistic, anti-type of the 19<sup>th</sup> century sentimental novel has usurped the place of the sentimentally drawn blonde and become the heroine, or, at least, the female protagonist. (67)

エイリーンが、都市に見られるようになった新しい女のイメージを示していることが分かる。しかし、自立と幸福を追求し強い意志と新しい考え方を持つ女性として描かれる一方でエイリーンは、クーパーウッドに向かって簡単に「あなたのためなら何でもするわ。愛しい人。」「もし必要なら死んでも構わないわ。」(F 147) と言う程、男性への愛に身を捧げる感傷的な側面を持つ女性としても描かれている。<sup>15</sup> そして彼女の、男性に従属し愛に生きるというセンチメンタルな側面はクーパーウッドが人生に描く価値とは対照的に示されており、彼女が必ずしも「反 19 世紀的女性」というわけではなく、古い価値観に共感するものとしても描かれていることが分かる。また、エイリーンの牧歌的側面は作品における彼女の外的描写にもみることができる。例えば、クーパーウッドがエイリーンの外見について「彼女の体の、古代ギリシア建築に見られる様な滑らかな円形装飾的(medallion)曲線が好きだった」(F 146)と述べているが、ここでも彼女の美を古代ギリシアのイメージを用いて示し、牧歌的イメージを喚起している。<sup>16</sup>

この様にエイリーンは牧歌的イメージを持つ一方で、世俗化し都市に出ていこうとする女性としても描かれているのであるが、エイリーンの都市的側面にはクーパーウッドの影響が大きく見られる。そのことは、二人の関係が知られた後の、バトラー氏の怒りからも窺うことが出来る。二人の関係を問いただされたエイリーンは父親に、クーパーウッドは妻と離婚し自分と結婚するのだと言い放つが、バトラー氏はカトリックの教育を受けさせてきた娘がそのようなことを言うことに対し、「彼は自分の娘が何処でそんな考えを手に入れたのか理解でき

なかった。狂った考えを持つマキャベリ主義者、クーパーウッドによるものとしか考えられなかつた。」(F 268)と怒りを表す。ここでは、父親により宗教的な教育を受けさせられ、因習的環境の中で育てられてきたはずのエイリーンが都市を示すクーパーウッドの力により変えられ、むしろ反因習的見解を示すものとなつたことが示唆されている。クーパーウッドとエイリーンの関係に、世俗化し都市に吸収されていく牧歌の様を読み取ることが出来る。

しかし、都市の中で牧歌が完全に吸収され消失していたという訳ではない。それは、クーパーウッドの釈放後、彼の妻となり、彼と共に更なる都市シカゴへと向かったエイリーンがそこで直面する現実をみると明らかである。シカゴに移転したクーパーウッドは、そこでの成功の反面、シカゴの社交界にはなかなか受け入れてもらうことが出来ないという現実に苦しむ。次第に彼はその原因として、シカゴ社交界が意外にも保守的価値観を持ち、「新しい女」であるエイリーンを疎んじていることにあると気がつく。シカゴ社交界に潜在する保守的価値観は、社交界の人々の持つ女性像に特に顕著である。

To really know the state of the feminine mind at this time, one would have to go back to that period in the Middle Ages when the Church flourished and the industrious poet, half schooled in the facts of life, surrounded women with a mystical halo. Since that day the maiden – and the matron as well – has been schooled to believe that she is of a finer clay than man, that she was born to uplift him, and that her favors are priceless. ... Now, the Chicago atmosphere in which Aileen found herself was composed in part of this very illusion. The ladies to whom she had been introduced were of this high world of fancy. They conceived themselves to be perfect, even as they were represented in religious art and in fiction. (T 63)

シカゴの社交界の人々が女性に因習的な理想を抱いていることが分かる。都市の社交界における保守性が女性に対するイメージを介して示されている。更に、この後本文には、社交界の女性達が新しくやって来たエイリーンに対し「彼女はかわいらし過ぎる。」あるいは、「彼女は威勢が良すぎる。」という印象を抱き(T 72)、彼女を社交界へ受け入れることを拒んでいることが示されている。エイリーンの世俗性がシ

カゴの社交界に受け入れられない要因となっているのである。都市社会の影響を受けた「新しい女」を示すエイリーンが、その世俗性故、都市の社交界に受け入れられないという矛盾がここでは起きているのである。また、このような現実を受けて、クーパーウッドのエイリーンに対する態度も次第に変化していく。クーパーウッドはエイリーンの持つ野心や、貪欲さを否定してはいないが、一方で彼女に対し「もしエイリーンがいくらか異なった性質の女性だったら！」(T102) と考えるようになる。

その後、クーパーウッドは鉄道事業でその力を伸ばし、多くの女性と不貞を重ねるようになる。社交界に無視された上、夫に浮気されるという現状にエイリーンは苦しみ、ついには自殺未遂を起こすまでになってしまふ。都市社会に吸収され都市的価値観を身に付けたエイリーンが、都市にみられる牧歌的理理想が原因で都市社会に馴染むことが出来ずに苦しんでいるという描写は、都市と牧歌の間に宙づり状態となり苦しんでいる当時の都市社会を生きる人々の葛藤を示していると同時に、都市が牧歌を完全に吸収することの不可能性も示していると考えられる。このことから、ドライサーの都市と牧歌の共存に対する懐疑的な見解が読み取れるとともに、新しい都市的価値と古い牧歌的理理想が混在した当時のアメリカ社会の現状も読み取ることができる。

### (3) Berenice Fleming — 「都市」と共存しうる「牧歌」

これまで見てきたクーパーウッドと二人の女性との関係はいずれもクーパーウッド自身の関心事である鉄道事業をきっかけとして始まつており、彼の女性に対する関心が、資本家としての成功への野望と並行して描写されていることが分かる。そして、そこにはクーパーウッドの牧歌的理理想への反抗的態度も示されており、都市と牧歌の共存に対する否定的な見解が読み取れる。

しかし、リリアン、エイリーンとの関係を通して相反するものとして示してきた都市と牧歌の関係は、彼と彼の最後の恋人となるベレナイシとの関係を通して、少し異なる形で描写されるようになる。ベレナイシは、クーパーウッドが知人から偶然紹介された未亡人、Mrs. Carter の娘で、自然界の生物と靈的交信力を持つ女性として描かれ、

『欲望三部作』の最後までクーパーウッドに影響を与える存在として描かれている。クーパーウッドは、初めてベレナイシを見かけた時、「それまで見たこともないような女性」であると感じ (T 321) 興味を示している。そして、彼女の牧歌的な美しさに惹かれていく。

With an indescribable smile which wrinkled her nose and eyes, and played about the corners of her mouth, she said: "Now I am going to catch a bird."

"A what?" asked Cowperwood, looking up and pretending he had not heard, though he had. He was all eyes for any movement of hers. She was dressed in a flouncy morning gown eminently suitable for the world in which she was moving.

"A bird," she replied, with an airy toss of her head. "This in June-time, and the sparrows are teaching their young to fly."

Cowperwood, previously engrossed in financial speculations, was translated, as by the wave of a fairy wand, into another realm, where birds and fledglings and grass and the light winds of heaven were more important than brick and stone and stocks and bonds. (T 357-58)

ここでクーパーウッドは、ベレナイシの美しさを自然の美しさと関連付けて感じており、また、彼女と知り合うことで「小鳥やひな鳥、草原や対空から来る世界が、レンガや石や株や債券よりも重要だ」と考えるようになっている。都市的価値よりも自然のもつ牧歌的価値に重きを置くようになっているクーパーウッドの見解の変化が窺える。彼と女性との関係が、都市社会での成功を示す手段としてのものから、自然崇拜のそれへと変化しているのである。

また、クーパーウッドはベレナイシに「エイリーンは自分を理解してはくれない」といい、以下のように述べる。

"I don't pretend to understand myself but it has occurred to me that there might be a woman somewhere who would understand me better than myself, who would see the things that I don't see about myself, and would like me, anyhow." (T 421)

そしてそのような女性がベレナイシであることをほのめかす。女性に影響を与え自分の支配下におくことを望んでいた彼が、女性に理解され、受け入れてもらうことを望むようになっているのである。マーク

スが「支配的エリートの持つ進歩主義的イデオロギーを描くアメリカ文学において、支配的側面を体現している登場人物は、利己的で道徳的に非難されるべき人物として描かれているが、彼らは皆、結局は自己回復を自然の回復と結びつけ、自然に理解されたいという牧歌的衝動を表そうとしている」と指摘し(59)、そのような欲望は、自然に近い領域における満足のいく生活に対する欲望であると述べているが(60)、<sup>17</sup>このことを踏まえると、ベレナイシに理解されたいと願い、更に名声や富よりもベレナイシの傍にいることのほうが幸せだと考えるクーパーウッドの態度(T426)には、まさに自然回帰への欲望が示されており、それを導くものとしてベレナイシがいるのである。

その後クーパーウッドはエイリーンとの離婚を望み、ベレナイシに求婚するのだが、すぐにクーパーウッドの求婚を受け容れ、彼に従属するものとして描かれたリリアンやエイリーンとは異なり、ベレナイシは自身の道を貫くことを望み、結婚を拒否する。彼女が牧歌的価値を示す女性像として描かれていると同時に、自立を試みる女性という新しい側面を持った女性像としても描かれていることが分かる。そして、それら二つのイメージの中で宙づり状態となり、結局はクーパーウッドに見捨てられてしまったエイリーンとは異なり、ベレナイシは、最後までクーパーウッドにとって重要な女性として存在する。つまり、ベレナイシという一人の女性の中に、都市と牧歌という二つのイメージが相反するものとしてではなく、同時に存在しうるものとして示されているのである。

ベレナイシに関心を寄せ始めた当時、クーパーウッドはシカゴのみならず、アメリカ全土において名の知れた悪徳資本家となっている。都市を支配する立場となったクーパーウッドが、まだほんの若い女性であるベレナイシを前に、支配することをあきらめ、更に、これまで挑戦的な態度で接していた牧歌的自然愛を認める見解を示しているのである。都市に吸収されない牧歌の存在をクーパーウッドとベレナイシとの関係には見ることが出来、都市と牧歌の共存に対する可能性がベレナイシを介して示唆されていると考えられる。そして同時に、両者の共存に対するドライサーの肯定的な見解も読み取ることが出来るのである。

### 3. おわりに

このように、『資本家』、『巨人』の中に見られるクーパーウッドの激しい女性遍歴の中でも特に影響を持っている三人に着目し、都市と牧歌の関係という観点から彼らの関係の描写を見ていくと、クーパーウッドと女性達をそれぞれ都市を示すものと牧歌的理像を示すものとして読むことが出来、更にリリアンにより示された「都市」に潰される「牧歌」、エイリーンにより示された「都市」と「牧歌」の共存の不可能性、そしてベレナシにより示された「都市」と共存しうる「牧歌」という、都市と牧歌の関係の変化を見ることが出来る。彼らを通し、都市と牧歌が対立し混在する、アメリカ社会の曖昧さが示されているのである。実在する悪徳資本家をモデルとし、都市を生き抜く社会的強者の生活を描くことでドライサーが示そうとしたことが、単に資本主義社会の腐敗の実態だけではないことが分かる。クーパーウッドの女性遍歴に示された変化は、ドライサー自身の都市と牧歌の関係に対する曖昧な見解を示してもおり、二つの間に置かれた当時の人々の不安も示しているのである。そう考えると、1920 年代を目前に描かれた『資本家』と『巨人』はまさに、都市の示す新しい価値と牧歌的理像の示す古い価値が対立する時代の現状を明確に描いた作品として読むことができるのである。

### 註

- 1 C.T. Yerkes の生涯が如何に詳細に記録され、作品中に投影されているかについては、Gerber を参照。
- 2 以後本論文における和訳は全て筆者による。
- 3 『欲望三部作』第三部は第二部の発表後三十年を経て晩年に発表された。したがって第三部には第一、二部とは異なる作者の意識が見られ、前二作とは異なった解釈がなされている。そのため、本論では第三部については扱わず、別途改めて論じる予定である。
- 4 Goldfield 493-523。
- 5 Machor はこのことは特にアメリカの都市小説に顕著であるとし、それらは「都市の冷酷さや廃頬ぶりを描写しようとするが、同時に都市のもたらす豪華さや可能性に対する賛辞も示している」と指摘している（229）。
- 6 ウィリアムズの『田舎と都市』は、主に 16 世紀以降のイギリス文学に

見られる田舎と都市の観念の分析を行ったものであるが、都市と牧歌の対立を大きなテーマとしていたと考えられるアメリカ都市小説にも、彼の分析は当てはめることが出来る。また、ウィリアムズは「田舎」(the country) には「牧歌」(the pastoral) のイメージがあると指摘している。したがって本論では「田舎」と「牧歌」を同格の概念として捉えたい。

- 7 特にクーパーウッドの激しい女性関係を示す『巨人』に関しては道徳的非難が激しい。有名なものに、『巨人』は “Club sandwich of alternating layers of financial and erotic episodes.” という Sherman による批評がある。
- 8 ウィリアムズは、都市に対する観念は社会構造と共に変化していると指摘する。例えば 1617 世紀では金や法律、18、19 世紀では富や贅沢と結びつくと述べる。『資本家』の舞台が 19 世紀であることを考えると、資本家クーパーウッドが作品において都市を象徴するものとして示されていることが分かる。
- 9 クーパーウッドとホレイショ・アルジャーの関係は Pitofsky も参照。
- 10 以後 *The Financier* を F、*The Titan* を T と表記する。
- 11 マークスのこの論文は、彼の代表書 *The Machine in the Garden* (1964) の後、彼がそこに欠落していたパストラルの政治性について着目して書いたものであり、アメリカン・パストラルの観念を歴史、社会、文学的視点から論じたものである。
- 12 “Antique vase” という表現は英国詩人 Keats の *Ode on a Grecian Urn* (1820) を連想させる。古代ギリシア壺に施された絵がそのまま美しい言葉となった詩であり、女性を自然の美しさと結びつけ、その不变の美を讃えている。また、“Greek Chorus”は、ギリシア古典劇の途中で俳優を休ませるために登場し、声をそろえて歌いながら注釈をする一団を指すものである(Britannica Online)。女性をこのような古代ギリシア藝術に結びつけて示す描写はウィリアムズの言う牧歌の定義、“image of the past”ともつながり、ドライサーが女性の美を牧歌と結びつけて考えていることが窺える。
- 13 19 世紀後半のアメリカにおいて、上流階級の人々が建築家のパトロンとなり、自らも建設活動に関心を示すようになったことは珍しいことではない。有名な例として、当時の若手建築家 R.M.Hunt (1827-1895) の施主となった鉄道事業者 Vanderbilt 一族の一員である Alva Smith Vanderbilt が挙げられる。詳しくは Boyer を参照。
- 14 大邸宅完成までクーパーウッド夫妻はリリアンの旧邸宅に一時的に暮らすが、そこでも彼は自身の美への探究を満足させるために素朴であった彼女の家を自分の好みに変えようと、レイアウトを建築家 Ellsworth に依頼し 3,000 ドルを支払っている(F 55)。ここでも牧歌を吸収し都市化させようとするクーパーウッドの態度が見られる。

- 15 エイリーンのセンチメンタル性については Lindborg を参照。
- 16 “medallion”とは古代ギリシアの円形装飾品を示し、リリアンの描写に見られたギリシア壺と同様、古代ギリシア芸術のもつ牧歌的な美をほのめかしている。また、本作品の中には、クーパーウッドがギリシア壺や装飾品を収集し、満足している場面もみられるが（405）、彼が古代ギリシアの示す牧歌的な美に共感していることが分かる。
- 17 マークスは論文の中で、そのような作品の例として、*Moby-Dick*、*The Scarlet Letter*、*Huckleberry Finn*、*The Sun Also Rises*、*Miss Lonely-Hearts* 等を挙げている（59）。奇妙なことにマークスは論文の中でドライサーについて言及してはいない。しかし、彼の議論は、都市の支配者を主人公にしているという点から、『欲望三部作』にも当てはめることが出来る。

### 引用文献

- Boyer, M. Christine. *Manhattan Manners: Architecture and Style. 1850-1900*. New York: Rizzoli International, 1985.
- Cassuto, Leonard. “A Life Driven by Desire.” *The Wall Street Journal*. 4 May 2012, natl. ed.
- Dreiser, Theodore. *An American Tragedy*. 1925. New York: Signet, 2000.
- . *The Financier*. 1912. New York: Signet, 1967.
- . *The Stoic*. 1946. New York: Signet, 1981.
- . *The Titan*. 1914. New York: Signet, 1965.
- . *Sister Carrie*. 1900. 2nd ed. Ed. Donald Pizer. New York: Norton, 1991.
- . *Jennie Gerhardt*. 1910. New York: Penguin, 1989.
- Eby, Clare Virginia. “Dreiser and Women.” *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Ed. Leonard Cassuto and Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 142-59.
- Encyclopedia Britannica Online*. 2012. Encyclopedia Britannica. 4 Aug. 2012. <<http://www.britannica.com/>>.
- Gerber, Philip L. “The Financier.” *A Theodore Dreiser Encyclopedia*. Ed. Keith Newlin. Westport : Greenwood, 2008. 134-38.
- . “The Financier Himself : Dreiser and C.T.Yerkes.” *PMLA* 88 (1973): 112-21.
- Goldfield, David, ed. *The American Journey. A History of the United States*. New Jersey: Pearson, 2009.
- Keats, John. “Ode on a Grecian Urn.” *Poetic Works*. 1884. *Bartleby.com: Great Books Online*. Ed. Steven van Leeuwen. 2012. 5 Aug. 2012. <<http://www.bartleby.com/126/41.htm>>.

- Lindborg, Mary Anne. "Dreiser's Sentimental Heroine, Aileen Butler." *American Literature*. 48 (1977): 590-96.
- Machor, James L. "Pastoralism and the American Urban Ideal: Hawthorne, Whitman, and the Literary Pattern." *American Literature* 54 (1982): 329-53.
- Marx, Leo. "Pastoralism in America." *Ideology and Classic American Literature*. Ed. Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen. Cambridge: Cambridge UP, 1986. 36-67.
- Pitofsky, Alex. "Dreiser's *The Financier* and the Horatio Alger Myth." *Twentieth-Century Literature* 44 (1998): 276-90.
- Salzman, Jack, ed. *Theodore Dreiser: The Critical Reception*. New York: David Lewis, 1972.
- Sherman, Stuart P. "The Barbaric Naturalism of Mr. Dreiser." *The Stature of Theodore Dreiser*. Ed. Alfred Kazin and Charles Shapiro. Bloomington: Indiana UP, 1955.
- Walcott, Charles Child. *American Literary Naturalism. A Divided Stream*. Minnesota: U of Minnesota P, 1956.
- Warren, Robert Penn. *Homage to Theodore Dreiser*. New York: Random, 1971.
- Weir, Sybil B. "The Image of Women in Dreiser's Fiction. 1900-1925." *Pacific Coast Philology* 7 (1972): 65-71.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford UP, 1973.

土屋陽子「Jennie Gerhardtにおける自然空間の二面性——ジェニー像が示す「都市化する自然」と「牧歌的自然」」『名古屋アメリカ文学・文化』創刊号（2012）。